宣長と秋成

近世中期文学の研究

日野龍夫

筑摩書房

昭和五十九年十月三十日　初版第一刷発行

著者　日野龍夫
昭和十五年東京生。京都大学国文学科卒。現在、京都大学助教授。『徂徠学派』『江戸人とユートピア』『本居宣長集』（新潮日本古典集成）他。

宣長と秋成

発行人　布川角左衛門
発行所　株式会社筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二―八
電話　東京　二九一―七六五一（営業）
二九四―六七一一（編集）
郵便番号　一〇一―九一　振替　東京　六―四一二三
印刷　星野精版印刷　製本　矢嶋製本
乱丁落丁本の場合は小社読者係宛に御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

0095-82182-4604　© T. Hino 1984

序　説……三
Ⅰ
近世前期の江戸詩壇……一
国学以前の古典享受……二九
Ⅱ
近世中期における老荘思想……六一
読本前史……八九
Ⅲ
宣長学の成立……一三三

宣長における文学と神道……一五一
宣長と当代文化……一九四
Ⅳ
秋成と復古……二三三
秋成における歴史と人間……二五一
老境の秋成……二七五
あとがき……三〇一
初稿一覧……三〇三

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

宣長と秋成

――近世中期文学の研究――

序説

本書で「近世中期」と称するのは、宝暦（一七五一～一七六四）・明和（一七六四～一七七二）を中心にした三、四十年間、享保の改革の緊張がゆるみ、次の寛政の改革によって再び緊張がもたらされるまでの間、幕藩体制は下降線をたどり続け、それにともなうひずみは相変らずのことながら、社会がやや自由な空気を取りもどした時期を指す。それは、文化を論ずる際に前期・後期に分けるのが普通である近世の、その前期と後期の接点に当る時期である。

文学史の上でのこの時期は、およそ八十年にわたって小説界を支配してきた浮世草子が衰えて、読本・談義本・洒落本などそれに代る小説様式が一斉に芽をふいたこと、あるいは芭蕉の没後低迷を続けてきた俳壇がいわゆる中興期を迎えたこと、漢詩文が儒学の拘束を脱して文学として自立したこと、等々の事例が示すように、新しい文学を模索するさまざまな動きが活発に展開された時期であった。

この時期の文学史を概括する視点は色々にありうるであろうが、私は、文学と学問の接触、あるいは文学史と思想史の接触ということを、この時期の文学の最大の特徴として挙げたい。前代の元禄期について、伊藤仁斎の儒学説と芭蕉・西鶴・近松の文学とに、人間肯定の思想が共通するということがいわれたりするが、それは元禄

の文化を大観する時に時代思潮としてそういうことがいえるということであって、仁斎と芭蕉・西鶴・近松との間に直接の影響関係があったわけではない。この時期はそれと異なって、右にいう模索の動きが、具体的な表れ方はさまざまであるが、学問のもたらす新しい認識の目をもって文学を活性化しようとする動機を概して共有しており、文学と学問・思想との間に、思想の内容においても人脈においても、直接のつながりのある場合が多い。文学は私的な営み、学問・思想は公的な価値を求める営みであるから、両者の接触は、宣長や秋成において顕在化するように、ある域を越えると矛盾をかかえこむ。しかし新しい知識と新しい認識には、それまでの文学にあきたりなかった人々に大きな示唆を与える点が確かにあった。

右に挙げた事例についていえば、古文辞派（荻生徂徠の学統）の〝学問的な〟擬古主義の詩文は、日本近世の現実とかけ離れたその作風が、むしろ高踏的浪漫的な世界を構築するものとして時好に投じ、一世を風靡した。中興俳諧にも、ことに蕪村に顕著であるが、古文辞派の詩文から素材や詩想を取り入れる傾向が見出される。

読本は、古義堂（伊藤仁斎の学塾）系統の漢学書生たちが愛読した中国白話小説の手法を学んで生れた、という起源からして学問と結びついていたし、また歴史小説としての正確な時代考証、難解な語彙、一見識ある寓意等々、全体にただよう知的な雰囲気は、まさに小説の面目を一新するものであった。

談義本は通俗的な教訓読物で、風俗の軽薄を批判し、人として守るべき道を説く議論の中に、風俗の背後にある当代の思想界の動向への批判や、作者の奉ずる思想を表明することが多い。その思想の質はしばらく問わず、その批判精神は、娯楽の提供者たるに甘んじていた末期浮世草子の作者たちには見られないものである。

洒落本は、文人意識に浸透された漢学書生の手すさびになる漢文戯作として出発した。それらの初期洒落本には漢文の有名古典のパロディなどが横溢するが、折角の学問を戯文の中に浪費して興ずるという意識の屈折もま

た、それまでの文学にはほとんど見出せない。

右のほか忘れてはならないものに、国学がある。同じく〝道〟の究明を目的とする学問でありながら、文学を重視する点で、国学は儒学とはかなり趣きを異にする。これまでに挙げてきた文学が現在作られつつある文学であるのに対して、国学のかかわる文学は古典文学であるが、賀茂真淵と本居宣長は、作られつつある文学にも反映しているところの、当代文化の根本にある新しい認識への欲求に応えて、わが国の文化伝統の考察を踏まえた新しい人間観のもとに古典文学をよみ返らせた。国学もまた、まさにこの時期に思想史の表面に浮上してきたのも当然の、学問と文学の接触の事例なのである。真淵の復古調和歌の提唱や建部綾足・上田秋成の読本制作など、国学が文学的実践への刺激でありえたのも、そのことを裏付けている。

以上に見てきたような、この時期における文学と学問の接触には、人々の知識欲の増大、学問の流行という背景がある。そのことをもっとも見やすい形で示すのは、当時の小説、末期浮世草子や談義本に盛んに登場するしろうと・くろうとの学者先生たちである。商家の主人などの熱狂的な学問癖を描いて一篇をなしたものに、浮世草子『世間学者気質』（明和五年刊）があるほか、学問する者を主人公とする一巻一章を含む作品は数多い。学問をすることが一つの流行風俗として扱われて、小説の絶好の素材となったのは、日本文学史上、あとにも先にもこの時期だけではあるまいか。

風俗になるほど学問が流行し、多くの人が学問に向ったのは、学問がそれだけ魅力的な営みとなったからであるに違いない。学問といえば第一義的に儒学を指すという状況は近世を通じて変らなかったが、そうはいっても、百年を越える天下太平の中で成熟した文化はおのずから儒学の独占的支配力を衰えさせ、この時期のすこし前、享保ごろから、さまざまな学問分野が分化独立し始めた。試みに、近世前期と中期の大坂の地誌、延宝七年（一

六七九）刊の『難波雀』と寛延元年（一七四八）刊の『難波丸綱目』をとって、それぞれに記載されている学問の師匠の種類を対比してみる。

難波雀

歌学者　講釈師（儒書講釈）　文字知り（博識家）　算者（算術家）

難波丸綱目

天文者　神学者　暦学者　有職者　歌学者　儒学者　韻鏡者（音韻学者）　詩文学者

医学者　本草者（博物学者）　算術者

『難波丸綱目』の反映する学問の分化の傾向は明白である。分化することによって、学問は人々の多様な学問的欲求を吸収することができるようになり、いよいよ流行するわけであった。

小説に登場する学者先生たちは、決して尊敬をもっては遇されず、戯画化されるのが常であるが、学問が、新しい知識を獲得することが所与の現実を乗り越える新しい認識の目を開くという、学問のみが与えうる喜びを人々に与えつつある有様は、そうした戯画化の描写の行間からも十分汲み取ることができる。前掲『世間学者気質』から話を二つ拾ってみよう。

巻一。京都の町人布袋屋徳太郎は、漢詩文を愛好するあまりに中国に憧れ、衣服調度などをすべて中国ずくめにし、中国語を学び、中国に行ってみたいと思う折しも、父が死ぬ。父の喪は三年という儒教の規定を律儀に守って三年間奥に引きこもっている間に、奉公人たちが店の金を使いこみ、その他の不運も重なって、徳太郎は破産する。改めて薬菓子屋を開くがうまくゆかず、「人間総是夢也（じんかんそうぜむもなり）」と中国語で愚痴をこぼす。

巻三。そろばんの上手な三郎兵衛は、人に自慢して、自分は算学のほか天文・暦学も修め、「只今の法は持受

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

暦の法でござるが、何というても粗い物ゆゑに少しづつの違ひがござつて、すでにもつてこの元日の日蝕なども違ひまするが、拙者がこしらへた暦法では、いかないかな一厘一忽も違ひはいたさぬ」などというが、実人生の計算にうといため、一向にうだつが上らない。最後には、極楽道中の費用を細かく計算した刷物を社寺の縁日に売りまわって、糊口をしのぐ。

徳太郎や三郎兵衛の現実への不適応症状は、学問のもたらした新しい認識をもって、足もとの現実を一気に飛び越えてしまうところに生ずる。徳太郎は自分を中国の文人に虚構することによって、日本の近世の京都の町人という所与の自分を拒否しようとした。三郎兵衛は、しがない下層民である自分に対しても門の開かれた、数式のつむぎ出す壮大な抽象の世界の魔力にとりつかれて、自分の現実を忘れた。

ばかばかしい誇張を旨とする末期気質本の描くところがそのまま事実であるはずはないが、このような話にも学問的欲求というものの真面目な意味が幾分かは反映していよう。布袋屋徳太郎の話に、中国に憧れた徳太郎が、「来年の春は、どうぞ長崎まで行たらば、商人船に便船して、入唐せばやと存じ候」と考えたという一節がある。もとより海外渡航は国法によって厳禁されているから、小説の作者はこれを徳太郎の愚かさを物語るたわ言として書いたに過ぎない。しかし海外渡航が完全な不可能事であるだけに、作者の意図とは無関係に、徳太郎の言葉は、基本的には停滞した、相対的には自由な空気の流れていたこの時期の、学問愛好の風潮の深奥にあった、現実を越えたいという願望をはしなくも照らし出しているのである。

文学と接触した学問は、今日の言葉でいえば文科系の分野、具体的には儒学・国学・老荘・史学等々である。この時期の学問としてのそれらは、右の願望によって特徴づけられる側面を有するはずである。本書では、この時期の主要な文学者のうちから本居宣長（一七三〇～一八〇一）と上田秋成（一七三四～一八〇九）を選んで、以上

に述べてきたような視点から、二人の活動に表れた文学と学問の接触の様相を明らかにしてみたい。二人の活動は、ここでいうところの「近世中期」を越えてはるか後年まで続く。しかし宣長も秋成も宝暦年間に青年期を過ごして、生涯の活動を規定するほどの影響をこの時期の文化から受けた。宣長の『紫文要領』『石上私淑言』は宝暦十三年（一七六三）に、秋成の『雨月物語』は明和五年（一七六八）に執筆されたが、二人の生涯のモチーフはすでにここに出そろっているといってもよいのである。

論文の構成は、二人の活動に見出される問題点のうち、古典享受・老荘思想・歴史への関心ということを、この時期の文化の共通の問題点としてまず一般的な形で取り上げ、しかる後に二人に及ぶ。

宣長と秋成は、人間の自由を回復するための新しい認識を等しく学問――具体的には国学――に求めた。しかし、前にも触れたが、人間の価値、公に対する私の価値が確立されていない前近代においては、そうした営みは、真摯であればあるほど矛盾を内包せざるを得ない。宣長は、私情の自由を封建的規範の抑圧から救済するために「物のあはれを知る」心を構想したが、道＝公的規範を求めることを要請される前近代の学問の性格に引きずられて、その心を封建的規範に代るべき公的規範にまで昇格させ、神道と結びつけた。その過程で宣長の関心はおのずから新しい正しい規範である神道へと移り、人間の自由そのものへの関心は見失われた。秋成は、人間の自由への関心を終生失うことはなかったが、その代り、そのようなものを保護しようとする営みに公的価値があると信ずることができず、ついに自己の学問を遊びと観ずるに至った。したがって国学者としての業績は二流に終るほかなかった。

二人の文業における学問の対照的なあり方は、近世中期の文学者が真摯に学問に臨んだ場合の両極端の姿を示しているのである。

I

近世前期の江戸詩壇

一

延宝期（一六七三～一六八一）の芭蕉の俳諧に、『荘子』や漢詩文への顕著な親近が見出される。そのこととかかわりがあるのかないのか、いまだ不明に属するが、同じ時期の江戸の漢詩壇にも、『荘子』的思考をバネとして文学精神を解放しようとする動きがあった。近世中期の思想史に現れる老荘思想の流行について、「近世中期における老荘思想」の章で考察するが、その考察に示唆を与えるであろう近世前期の江戸詩壇の『荘子』への傾斜を、本章で取り上げてみたい。

老荘への関心が生れる一つの契機は、支配的現実の強大さに対して自己の無力を知っている者の、それでもなお現実にあき足りぬ思いを抱き、心の持ち方の転換によって現実を越えたいと欲する願望であろう。現実の有する支配力が多くの場合儒学に淵源していた近世においては、本来、反儒学の老荘には、現実超克の願望に出口を与える一面があった。そのような老荘思想の役割を、寛文（一六六一～一六七三）・延宝ごろの江戸詩壇の『荘子』受容に当てはめてよいものならば、その江戸詩壇を構成していたのは、ほかならぬ朱子学の総元締め、林家の学

塾に集う人々であったのであるから、問題はきわめて興味深くなる。

この人々の文学的試みは、それとしてはいうに足りるほどの達成を生み出しはしなかったが、朱子学の支配力をつき崩そうかという動きが、早くもこの時期に、すなわち林家二代目の鵞峰（羅山の三男、延宝八年没、六十三歳）に弘文院学士の称号が許され（寛文三年）、林家塾に五科十等の学習課程が制定される（寛文六年）など、林家の学問が官学として整備されつつあるその時期に、林家の内部から発生してきたこと、しかもそれが文学運動としてであったことは、注目に値する。近世前期の漢詩文が儒学に包摂されていたことの意味は、これまで漢詩文の側からのみ解釈され、漢詩文にとっての不幸といわれてきたが、儒学の側からすれば、それは爆弾を抱えているに等しい事態であった。文学の反乱が儒学の革新を惹起し、あるいは促進したのが、仁斎学・徂徠学の場合である、といういい方をすれば、延宝前後の江戸詩壇の動向にはそこまでの起爆力はなかったが、朱子学の権威を内部から蚕食する役割を果す意味はあったようである。

江戸詩壇と特にいうからには、当時におけるもう一つの詩壇、京都詩壇にはそのような動きが見出されなかったことを、まずいわなければならないことになるが、江戸であれ京都であれ、写本で伝わる詩集の調査のほとんどなされていないこの時期について、ある現象が存在しなかったと断定するのは、実は危険である。近世前期によく読まれた『荘子』の注釈書『荘子虔斎口義』（林注）の「発題」に指摘するところの、『荘子』の文章の〝鼓舞変化〟についての関心は、延宝初年に備前岡山の腐儒岡西惟中の山師的俳論に示唆を与えるほどまでに普遍化していたし、思想についての共鳴も、やや時代を下げれば、たとえば元禄ごろ古義堂と並んで京都詩壇を領導した鳥山芝軒の七絶、

荘子

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com